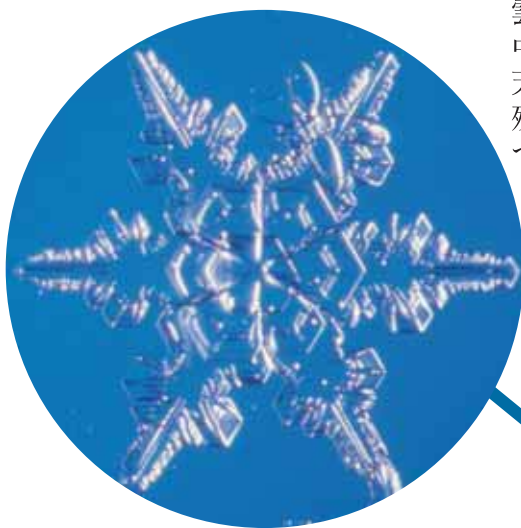


立山の雪の一生

立山には、美しい雪結晶から何千年も残る氷河水まで、様々な時間スケールを持つ雪が存在します。

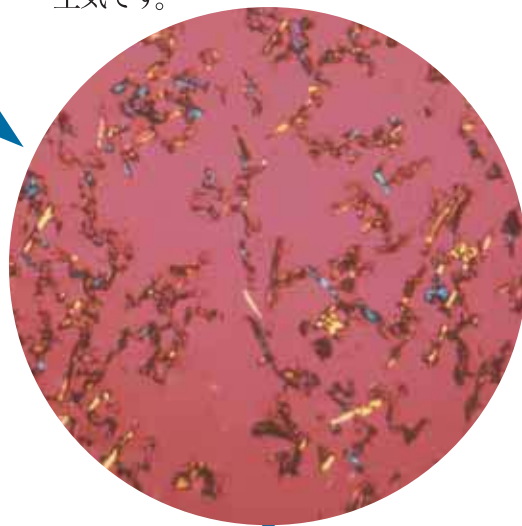
雪結晶

降ってくる雪の結晶形は千差万別で、雲の中の気温と湿度でその形が決まります。中谷宇吉郎博士はこのことから「雪は天から送られた手紙である」という名言を残しました。立山の雪の一生は雲の中でつくられた雪結晶からはじまります。



新雪

積もったばかりの雪はまだ結晶形を残していて新雪とよばれます。その90%以上は雪粒のまわりの空気です。



雪の一生

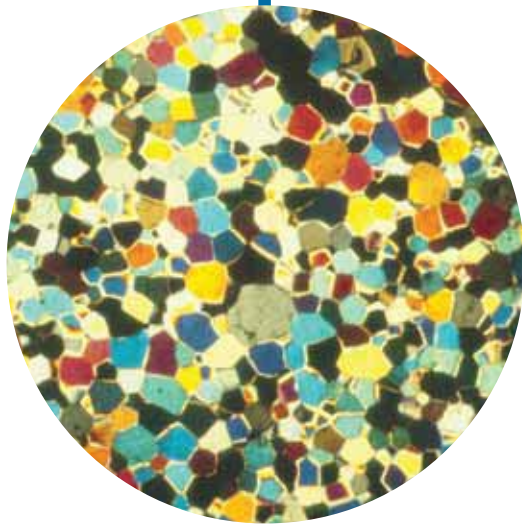
氷河水(氷河の下層)

氷河深部の氷河水です。深くなるにつれて結晶粒間の結合が増し、粒径が大きくなります。これが美しい雪結晶からはじまった雪の一生の一番長生きをした姿です。



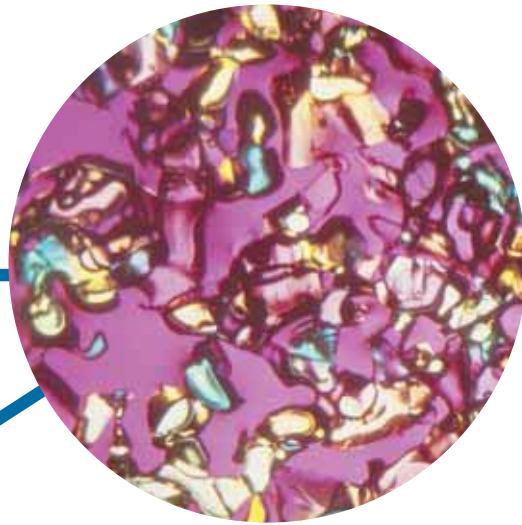
氷河水

積雪が長く残り押しつぶされ続けると、中の空気の粒すべてが閉じこめられて通気性がなくなります。このときの積雪の密度は830kg/m³で、このように固く押しつぶされた積雪を氷河水とよびます。劔沢や内蔵助雪溪などには、年を越して残り続けた雪が氷河水となって存在します。



しまり雪

新雪は、上に積もる雪や自らの重さで押しつぶされ、空気の間隙が狭くなってきます。また結晶の枝が蒸発して丸みを帯び網目状につながり、丈夫なしまり雪となります。



ざらめ雪

プラスの気温や日射をうけると、雪粒は融けて水の膜で覆われます。これが夜間に再び凍ることを繰り返すと、粒径が1~3mmの大粒のざらめ雪となります。

